

# 小名浜道路整備事業遺跡発掘調査報告

添野町大町遺跡

2022年

福島県教育委員会  
公益財團法人福島県文化振興財団  
福島県土木部



# 小名浜道路整備事業遺跡発掘調査報告

そえ の まち おおまち  
添野町大町遺跡



## 序 文

「ふくしま復興再生道路」は、東日本大震災からの被災地の復興と住民の帰還を加速させるため、避難指示区域やその周辺における広域的な物流、地域医療及び産業再生を支える幹線道路として整備が進められております。の中でも小名浜道路(主要地方道いわき上三坂小野線)は、小名浜港と常磐自動車道を自動車専用道路で結ぶことで、県の沿岸部と内陸部との物流ネットワークを強化し、小名浜港とその周辺地域の産業と観光の拠点化を図るものであります。

福島県教育委員会では、同事業計画地内に所在する添野町大町遺跡について、埋蔵文化財の保存のための協議を行いましたが、現状での保存が困難であったため、記録保存のための発掘調査を実施することといたしました。

本報告書は、令和4年度に実施した、添野町大町遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。発掘調査の結果、中世頃と推測される遺構・遺物が確認されました。添野町大町遺跡の周辺には中世の城館跡が多数分布していることから、本遺跡もそれに関連するものと考えられます。

この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成に当たり、御理解と御協力を頂いた福島県いわき建設事務所、いわき市教育委員会、公益財團法人福島県文化振興財団を始めとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和4年11月

福島県教育委員会  
教育長 大沼博文



## あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大规模開発に伴う埋蔵文化財の調査を実施しています。特に、震災以降は浜通り地方において復興関連の調査を多く行ってきました。

本報告書は、令和4年度小名浜道路整備事業遺跡発掘調査における添野町大町遺跡の調査成果をまとめたものです。現在、いわき市で建設工事が進められている小名浜道路は、重要な港湾の小名浜港と常磐自動車道を東西に結ぶ自動車専用道路で、「ふくしま復興再生道路」の一つに位置づけられています。

添野町大町遺跡は、小名浜道路建設予定地のほぼ中央に位置する中世の集落跡で、遺跡の北隣を「旧陸前浜街道」(主要地方道常磐勿来線)が通過しています。また、添野町大町遺跡の周辺には、中世の城館跡が多数分布しています。これらのことから、添野町大町遺跡の集落は、中世の城館が取り巻く要衝の一角で営まれていたものと考えられます。

郷土の歴史研究の基礎資料として、さらにはふるさとの文化を理解するための資料として、生涯学習の場などで本報告書を広く活用していただければ幸いです。

終わりに、今回の発掘調査に御協力いただきました関係諸機関並びに地域住民の皆様に厚くお礼申し上げます。また、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年11月

公益財団法人 福島県文化振興財団  
理事長 鈴木淳一



## 緒 言

- 1 本書は、令和4年度に実施した小名浜道路整備事業関連遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。  
添野町大町遺跡 福島県いわき市添野町大町 遺跡番号：0720401485
- 3 本事業は、福島県教育委員会が福島県土木部の委託を受けて実施し、調査に係る費用は福島県土木部が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財團に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財團では、遺跡調査部の下記の職員を配置した。  
副主幹 香川 憲一
- 6 本書の執筆は、香川が行った。
- 7 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに福島県土木部作成の工事計画図を複製したものである。
- 8 引用・参考文献は、執筆者の敬称を略して掲載した。
- 9 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関から協力・助言をいただいた。  
いわき市教育委員会 公益財団法人いわき市教育文化事業団

## 用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 表記がない遺構図は、すべて図の真上を座標北とした。
- (2) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。
- (3) 標 高 断面図及び地形図における標高は、海拔標高を示す。
- (4) 座 標 平面図における座標は、国土座標第Ⅳ系の数値を示している。
- (5) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。
- (6) ケ バ 遺構内の傾斜部は「 $\text{III}$ 」、相対的に緩傾斜の部分には「 $\text{I}$ 」、後世の擾乱部や人為的な削土部は「 $\text{II}$ 」の記号で表現した。
- (7) 網 点 等 網点等は各挿図中に用例を示した。
- (8) 遺構番号 当該遺構は正式名称で記載した。
- (9) 土 色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。
- (2) 番 号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。

3 本文中及び遺物整理に使用した略記号は、以下のとおりである。

- いわき市… I WK 添野町大町遺跡… S O
- 溝 跡… S D 土 坑… S K 小 穴… P
- グリッド… G 遺構外堆積土… L 遺構内堆積土… ℓ

## 目 次

### 第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と地理的環境	2
第3節 歴史的環境	4
第4節 調査経過	6
第5節 調査方法	7

### 第2章 調査成果

第1節 遺構の分布	9
第2節 基本土層	9
第3節 溝跡	10
1号溝跡(10)      2号溝跡(10)      3号溝跡(10)	
第4節 その他の遺構	12
1号土坑(12)      2号土坑(12)      小穴(12)	

第3章 まとめ	14
---------	----

## 挿図・表目次

### [挿図]

図1 小名浜道路の位置	1	図6 基本土層	9
図2 工事計画と遺跡	2	図7 1~3号溝跡・出土遺物	11
図3 遺跡周辺の地形	3	図8 1号・2号土坑	12
図4 周辺の遺跡	4	図9 小穴	13
図5 遺構配置	8	図10 かわらけ	14

### [表]

表1 周辺の遺跡一覧	5	表2 小穴一覧	13
------------	---	---------	----

## 写真図版目次

1 調査区全景(南から)	17	5 基本土層断面(南から)	19
2 調査区東部(南東から)	17	6 1号溝跡全景(北東から)	19
3 調査区東部(北西から)	18	7 1号溝跡断面(西から)	19
4 作業風景(南西から)	18	8 1号・3号溝跡断面(南から)	19

9	2号溝跡全景(南から).....	20
10	3号溝跡全景(北西から).....	20
11	2号溝跡断面(南から).....	21
12	3号溝跡断面(南から).....	21
13	1号土坑全景(北から).....	21
14	1号土坑断面(北から).....	21
15	P 2断面(南から).....	21
16	P 4断面(南から).....	21
17	P 7断面(南から).....	21
18	P 9断面(南から).....	21
19	P 12断面(南から).....	22
20	P 13断面(西から).....	22
21	P 14断面(西から).....	22
22	P 15断面(西から).....	22
23	出土遺物.....	22

# 第1章 遺跡の環境と調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

現在、福島県いわき市の南東部において建設工事が進められている小名浜道路は、起点の泉町下川と終点の山田町塙を概ね東西に結ぶ総延長約8.3kmの自動車専用道路で、福島県が策定した「ふくしま復興再生道路（8路線29工区）」の一つに位置づけられている。

ふくしま復興再生道路は、原子力災害からの復興に向けた戦略的な道路整備事業であり、その一端をなす小名浜道路は、小名浜港を中心とする広域物流ネットワークを強化することにより避難地域の復興等を支援していくものである。

福島県教育委員会は、小名浜道路関連の貯水池建設予定地において、地形的に埋蔵文化財包蔵地の可能性がある箇所を確認したことから、令和3年度に公益財団法人福島県文化振興財団に委託して試掘・確認調査を実施した（2022『福島県内遺跡分布調査報告書29』福島県教育委員会）。調査の結果、中世の可能性が考えられる埋蔵文化財が発見・確認され、名称を添野町大町遺跡として『福島県埋蔵文化財包蔵地台帳』に登録された。また、添野町大町遺跡と貯水池建設予定地が重複する350mの範囲について、保存が必要とされた。

保存協議の結果、添野町大町遺跡350mの箇所については記録保存のための発掘調査を行うことが決定され、福島県教育委員会は、同調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施することとした。公益財団法人福島県文化振興財団は、令和4年4月1日付け福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部の職員1名を配置して添野町大町遺跡の発掘調査を実施した。



図1 小名浜道路の位置

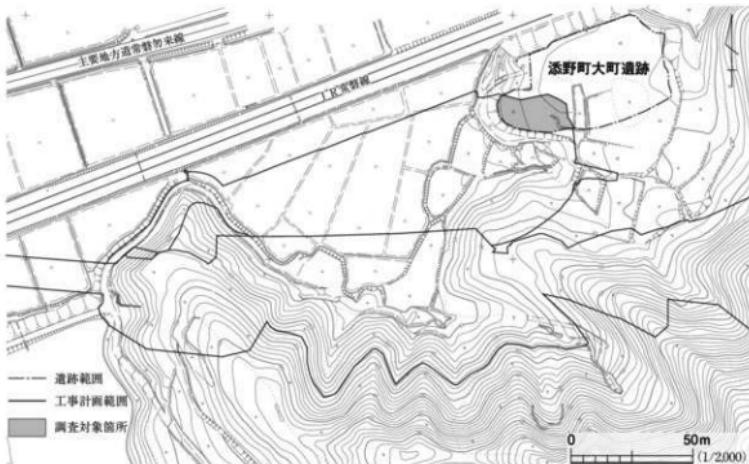


図2 工事計画と遺跡

## 第2節 遺跡の位置と地理的環境

添野町大町遺跡は、いわき市添野町大町に所在する。JR常磐線植田駅を起点とすると、遺跡の位置は、駅の北北東約2.1kmの地点である。いわき市の行政区画で見ると、遺跡の位置は、同市最南端の勿来地区東部にあたる。

いわき市は、福島県の太平洋沿岸地域を指す浜通り地方の南部に位置し、その南辺は茨城県と接している。いわき市の面積は約1,230km<sup>2</sup>と非常に広大で、また人口も福島県で最も多い中核市である。添野町大町遺跡の東約7kmの地点には、福島県最大の物流・工業港の小名浜港がある。

いわき市沿岸部の気候は、気温の年較差が小さい海洋性であり、福島県中部・西部の中通り地方・会津地方と比較すると、夏は涼しく、冬は雪が少ない。

いわき市の主要河川には、平地区の中心部を流れる夏井川、小名浜港に注ぐ藤原川、勿来地区を流れる鮫川があり、添野町大町遺跡の一帯は鮫川水系に属している。鮫川は、中通り地方の鮫川村松曾根山を水源とし、古殿町を経ていわき市に至る二級河川である。

浜通り地方の地形の大きな特徴としては、西半の阿武隈高地と東半の低地帯に明瞭に区分されるという西高東低の地勢があげられるが、いわき市においても同様である。阿武隈高地は、福島県東部を南北に縱貫する隆起準平原性の山稜で、東西の分水界及び中通り地方との境界である。

一方、浜通り地方の低地帯は、丘陵部・台地部・低地部に細分され、概ね東流する各主要河川の作用によって河岸段丘地形等が形成されている。丘陵部は、阿武隈高地の東縁から連続する定高性

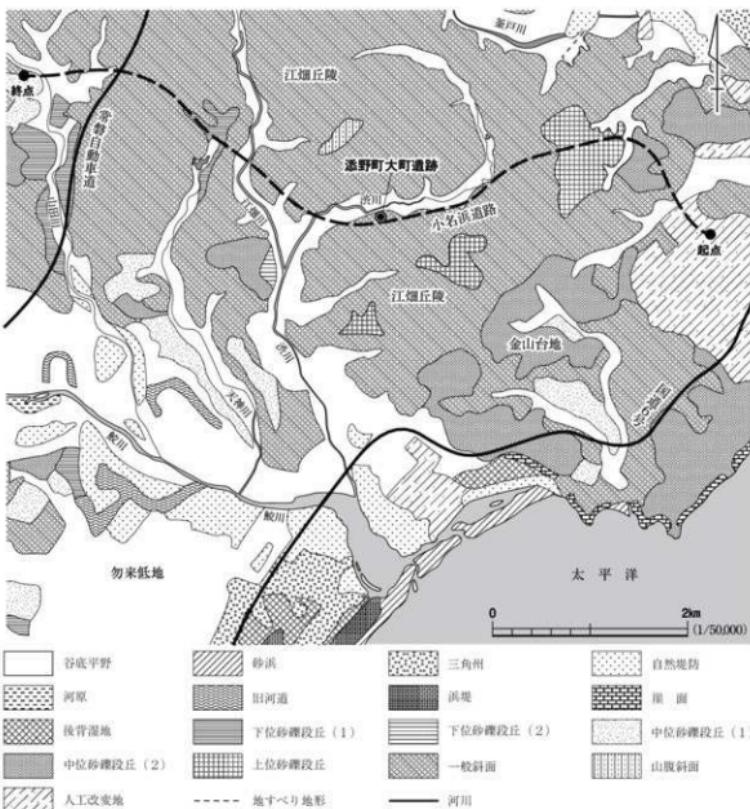


図3 遺跡周辺の地形

の支脈丘陵が主であり、上位段丘面が開析された姿とされる。添野町大町遺跡が所在する勿来地区東部では、鮫川下流の北側に江畑丘陵が広がり、その丘陵頂部には上位段丘面が部分的に残存している。江畑丘陵の所々を、渋川・江畑川等の鮫川支流が小河谷を刻んでいる。

台地部は概ね中位段丘域が該当し、勿来地区東部では、江畑丘陵から南東方向に金山台地が連続している。金山台地の東端は、小名浜湾と接している。

低地部は、谷底平野・下位段丘域が該当する。勿来地区では、鮫川沿いの勿来低地が知られる。勿来低地は、鮫川の河口付近で三角州が認められるものの、やや内陸に入ると自然堤防の発達が顕著であり氾濫原的な性格が強い低地である。

添野町大町遺跡は、江畑丘陵の地形区に属し、標高約20mの丘陵突端部に立地している。添野

町大町遺跡の北側には、渋川によって開析された標高約11mの狭長な谷底平野が東西に延びており、JR常磐線及び主要地方道常磐勿来線(旧陸前浜街道)が通じている。

### 第3節 歴史的環境

添野町大町遺跡が所在する勿来地区東部の地形は、およそ江畑丘陵、金山台地、鮫川水系に区分されるが、時代により遺跡の立地傾向も異なる。

勿来地区東部における旧石器時代の遺跡は、金山台地東端の輪山遺跡(61)が知られており、玉馱製の横長剥片を素材とするナイフ形石器が出土している。

次の繩文時代であるが、湾岸地形が発達するいわき市は、浜通り地方の中でも貝塚が集中する地域として知られている。小名浜湾を望む金山台地東端部に、著名な大畠貝塚がある。小名浜湾沿岸

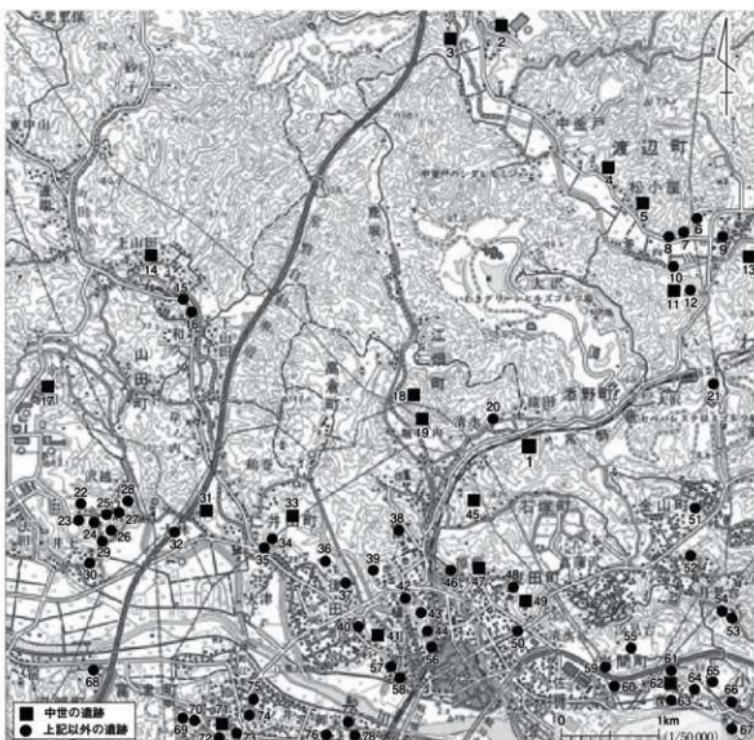


図4 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	No.	遺跡名	所在地	種別	時期
1	添野町大町遺跡	添野町大町	集落跡	中世	40	福ノ内遺跡	福山町福ノ内	散布地	弥生～平安
2	森田城跡	渡辺町上釜戸字堀之内	城郭跡	中世	41	鉢路道路	植田町鉢路・鉢輪・佐田町堀之内	城壁・敷石道・古墳～中世	
3	森小山城跡	渡辺町上釜戸字西仲田	城郭跡	中世	42	石田遺跡	植田町石田	散布地	古墳
4	表御跡	渡辺町中釜戸宇表前	城郭跡	中世	43	八幡台遺跡	植田町八幡台・桜台	城壁・敷石道・構文～中世	
5	松小原城跡	渡辺町松小原	城郭跡	中世	44	板台道路	植田町板台	散布地	縄～古・中
6	岸道路	渡辺町田部子岸	散布地	弥生～近世	45	石塚跡	石塚町下ノ前	城郭跡	中世
7	深町道路	渡辺町田部子深町	散布地	古墳～平安	46	Fノ前道路	石塚町下ノ前	散布地	古墳
8	水木道路	渡辺町田部字木水	散布地	古墳～平安	47	日吉瀬御厨	東田町日渡	石造物	中世
9	京・渡辺町条里跡	京・渡辺町明郎・洞	散布地		48	菅山道路	東田町菅山	散布地	古墳
10	江通道路	渡辺町田部字江通	散布地	古墳～平安	49	堀野跡	東田町	城郭跡	中世
11	清水船跡	渡辺町田部字清水	城郭跡	中世	50	東田条里跡	東田町	散布地	
12	清水道路	渡辺町田部字清水	散布地	古墳～平安	51	金山塙跡群	東田町金子平	窓跡	平安
13	忠北村船跡	渡辺町宇野作	城郭跡	中世	52	東北道路	金山町東台	散布地	縄文・弥生
	舟作道路	渡辺町宇野作	散布地	弥生	53	西ノ作A遺跡	小浜町西ノ作	散布地	構文
14	上山田城跡	山田町堀之内	城郭跡	中世	54	西ノ作B遺跡	小浜町西ノ作	散布地	縄・奈・平
15	埴道路	山田町埴	散布地	古墳	55	小原道路	岩間町小原	散布地	縄文～古墳
16	埴岡道路	山田町埴岡	散布地	縄文・古墳	56	八幡台古墳	植田町字八幡台	古墳	古墳
17	余木本船跡	山田町余木本・船下	城郭跡	中世	57	船山横穴墓群	植田町字船山	古墳	古墳
18	江畑船跡	江畑町堀之内	城郭跡	中世	58	船崎横穴墓群	植田町字船崎	古墳	古墳
19	原ノ船跡	江畑町堀之内	城郭跡	中世	59	岩間横穴墓群	岩間町	古墳	古墳
20	清水船跡	渡辺町清水	散布地	古墳	60	川崎道路	佐藤町川崎	散布地	古墳
21	泉大手道路	泉町大手	散布地	縄文～平安	61	輪山道路	岩間町輪山	散布地	旧石器～古墳
22	上野道路	山田町上野	散布地	古墳	62	輪山船跡	岩間町輪山	城郭跡	中世
23	沢越道路	山田町沢越	散布地	弥生・古墳	63	天神林古墳	岩間町天神	古墳	古墳
24	篠ノ口日遺跡	山田町臨ノ田	散布地	古墳	64	竹ノ花道路	岩間町竹ノ花	散布地	縄文～古墳
25	篠ノ田C遺跡	山田町臨ノ田	散布地	古～平・近	65	西小堀道路	小浜町西小堀	散布地	縄文～古墳
26	戸ノ内A遺跡	山田町戸ノ内	散布地	古墳	66	竹ノ舟跡	小浜町竹ノ舟	散布地	縄文～古墳
27	戸ノ口日遺跡	山田町戸ノ内	散布地	古墳	67	道遺跡	小浜町道	散布地	弥生～古墳
28	戸ノ内C遺跡	山田町戸ノ内	散布地	古墳	68	石笛遺跡	沼部町石笛	散布地	古墳・近世
29	協ノ田A遺跡	山田町協ノ田	散布地	古墳	69	福岡横穴墓群	鶴町字福谷	古墳	古墳
30	井上遺跡	山田町井上	散布地	弥生～平安	70	細行道路	鶴町字細行	散布地	弥生～古墳
31	大林城跡	山田町大林	城郭跡	中世	71	鬼城跡	鶴町鬼城	城郭跡	中世
32	大林条里剝跡	山田町大林	散布地		72	鬼下横穴群	鶴町鬼下	古墳	古墳
33	鳥内城跡	仁井田町鳥内	城郭跡	中世	73	東照櫻跡	鶴町東照下	社寺跡	近世
34	辰ノ口遺跡	仁井田町辰ノ口	散布地	弥生・古墳	74	江差A遺跡	鶴町江差	散布地	古墳
35	鳥内横穴墓群	仁井田町鳥内	古墳	古墳	75	江差B遺跡	鶴町江差	散布地	古墳
36	後田遺跡	後田町源道平	散布地	弥生・古墳	76	鳥居西遺跡	鶴町鳥居西	散布地	古代
37	後田古墳群	後田町源道平・月山下	古墳	古墳	77	御宝殿古墳	鶴町御宝殿	散布地	古代
38	衆ノ作跡	植田町衆ノ作	散布地	古墳	78	御宝殿古墳	鶴町御宝殿	古墳	古墳
39	小名田遺跡	植田町小名田	散布地	古墳					

はいわき市でも特に貝塚が集中する地域であり、さらに寺脇貝塚、綱取貝塚など全国的に知られた貝塚が分布している。なお、小名浜湾に注ぐ藤原川の水系域では、比較的内陸部にまで貝塚の分布が認められるが、鮫川水系域では貝塚を含む縄文時代の遺跡が少ない。

弥生時代では、鮫川の本流域に沿って遺跡が散見され、稲作文化の受容と沖積低地の関係が見て取れる。しかし、勿来低地は氾濫原的な性格が強いためか、江畑丘陵・金山台地など勿来低地を見下ろす高台上に弥生時代の集落跡が立地している。輪山遺跡(61)、八幡台遺跡(43)は、後期弥生土器の基準資料遺跡である。辰ノ口遺跡(34)では、十王台式期の弥生土器が確認されている。

古墳時代に入ると遺跡数が増加し、勿来低地を中心とする土地開発が進行したものと見られる。勿来地区の古墳は、後期のものが主体である。後田古墳群(37)の1号墳から出土した脚付陶埴は、東北地方で唯一のものである。いわき市は横穴墓が多い地域として有名であるが、鮫川本流域においても館山横穴墓群(57)、館崎横穴墓群(58)が知られている。館山横穴墓群6号墓の奥壁に

は、馬、渦文が線刻されていた。

奈良時代の養老二年（718年）、常陸国から分離した菊多郡を加えて石城国が新建された。しかし、石城国は10年以内に陸奥国に再編入され、以後、菊多郡は陸奥国の玄関口となる。館跡遺跡（41）では奈良時代の、八幡台遺跡（43）・西ノ作B遺跡（54）では奈良～平安時代の集落跡が確認されている。律令期の土地制度に条里制があるが、いわき市では、国土調査図、地籍図等を利用して、悉皆的な条里制跡の分布調査が行われている。しかし、鮫川流域では、勿来低地の氾濫原的な影響もあってか、他地域よりも条里制跡が少ないようである。鮫川左岸域では大林条里制跡（32）がある。平安時代の生産遺跡としては、円面鏡、杯、甕等が出土した金山窯跡群（51）があった。

中世に入ると、これまで遺跡があまり認められなかった江畑丘陵の内陸部にも城跡館の分布が確認できる。鳥内城跡（33）は単郭式で空堀がコ状に巡り、土塁も認められる。勿来低地沿いの舌状台地に近接して立地する複合遺跡の館跡遺跡（41）・八幡台遺跡（43）は、いずれも4つの曲輪で構成される連郭式の城館跡でもある。館跡遺跡で確認された城館跡は、中世文書に記されている「上田城」の有力比定地とされている。

#### 第4節 調査経過

添野町大町遺跡の調査期間は、令和4年5月9日（月）～5月31日（火）である。なお、令和4年6月7日（火）に、いわき建設事務所、県教育庁文化財課、当遺跡調査部の関係職員で調査終了状況を確認し、引渡しを行った。

各週の調査経過は以下のとおりである。

**5月9日～13日** 9日に現地入りし、調査対象箇所（以下、調査区とする。）の網張りを行った。

10日、バックホーによる表土掘削作業を、調査区西部から開始した。11日から作業員が入り、遺構検出作業に着手した。同日、調査区内に測量基準杭・ベンチマークを設定した。12日、調査区南東部で1号・3号溝跡の一部を検出した。

同日、バックホーによる表土掘削・排土運搬作業が終了した。13日は、雨天のため作業を中止した。

**5月16日～20日** 16日、雨天のため作業を中止した。17日、午前中は排水作業と泥土除去作業を行った。午後から遺構検出作業を再開した。18日、1～3号溝跡、1号・2号土坑、小穴を検出した。19日、1～3号溝跡の掘削作業を開始した。20日、1～3号溝跡の掘削作業を継続した。

**5月23日～27日** 23日、前日の雨の影響による調査区内の排水作業と汚れた検出遺構の清掃に終始した。24日、1～3号溝跡、1号・2号土坑、小穴（P 1～6）の断面・平面記録を行った。また、3号溝跡の平面記録を行った。25日、1号溝跡、1号・2号土坑の平面記録を行った。また、小穴（P 7～15）を検出し、半截した。26

日の午前中に2号溝跡とP 7～15の平面記録等が終わり、検出遺構すべての調査が終了した。同日午後、調査区内の清掃を行い、調査区全景・遺構集中地点等の写真撮影を行った。27日は、雨天のため作業を中止した。

**5月30日・31日** 30日、調査区の地形測量図を作成した。31日、調査区からの撤収作業等を行い、添野町大町遺跡の発掘調査が終了した。

## 第5節 調査方法

表土掘削作業は、効率化を図るため、バケットに平爪を装着したバックホー(0.45m<sup>3</sup>)を使用して行った。また、表土掘削作業で生じた土砂についてもバックホー(0.45m<sup>3</sup>)で運搬作業を行い、調査区南側の指定された堆土置場に搬送した。

遺構検出・掘削作業は、原則として人力で行った。遺構掘削は、2分割法等で常に土層観察を行なながら実施した。検出状態又は重複関係が不明瞭な遺構については、検出段階で先に最小限の断割りを行い、その土層断面を観察しながら掘削を行った。また、各遺構の完掘後は、断割りによる底面、壁等の最終確認を行った。

今回の調査対象範囲、遺構等の位置を正確に示すため、調査区を公共座標区系X=104.570、Y=86.590を基点とする10m四方のグリッドで網羅した。各グリッドの名称は、基点から南方向へA・Bのアルファベットを、また東方向へ1～4の算用数字を付け、その組み合わせによってA1～B4と表記した。

調査区内に各グリッドの位置・範囲を示すため、測量基準杭を兼ねた木杭を、測距測角儀を用いて打設した。また、調査区内に標高を示すベンチマークを設置し、水準測量用の基準点とした。

基本土層の表記は、大文字Lとローマ数字の組み合わせを基本とし、さらに細分した土層についてはアルファベットを付加して、L I aのように表した。遺構内堆積土については、小文字ℓと算用数字をℓ 1・ℓ 2…のように表記した。

遺構番号は、発見順で1号溝跡・2号溝跡…のように通し番号を付けた。また、便宜上、用例に示した略記号と算用数字を組み合わせてSD 01・SD 02…のようにも表記した。

遺構の実測は、平面・断面のセットを原則とした。遺構実測図は、1/10・1/20の縮尺で作成した。遺構の平面実測は、簡易造り方測量又は測距測角儀を使用して行った。地形測量図は、等高線を25cm単位とし、1/100の縮尺で作成した。

写真記録は、デジタル1眼レフカメラ、デジタルコンパクトカメラの2機種を使用して撮影を行った。

発掘調査で得られた各種記録・出土遺物は、公益財团法人福島県文化振興財團遺跡調査部で整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。

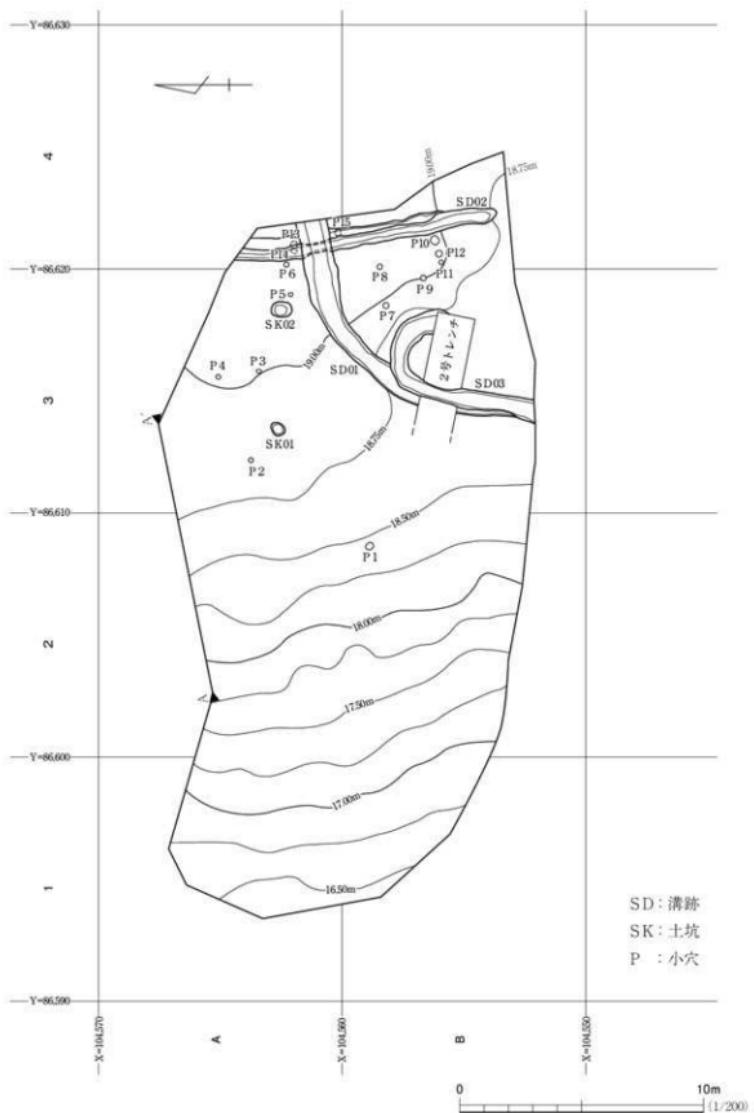


図5 遺構配置

## 第2章 調査成績

### 第1節 遺構の分布(図5)

調査の結果、溝跡3条、土坑2基、小穴15個を検出した。遺構検出面はすべてL II上面である。各遺構の時期はいずれも不明であるが、令和3年度の試掘・確認調査で指摘されているように中世頃の可能性がある。

調査区の地形は、西に張り出す丘陵頂部の平坦地で、傾斜度は中央～西部が8°未満、東部がほぼ水平である。調査区の南～西側は崖になっている。検出遺構は、調査区東部に集中しており、わずかにP 1が調査区中央部に位置している。1～3号溝跡は重複関係にあり、2号溝跡が最も古く、3号溝跡が最も新しい。1号溝跡東端・2号溝跡北端の状況から、両溝跡はさらに調査区外へ延びている可能性が高いと考えられる。しかし、3号溝跡は、崖のため南端部で途切れている。

P 1～15は、いずれも比較的浅い小穴である。小穴の分布状況から、建物跡等を確認することはできなかった。しかし、P 13～15については、堆積土の状況から柱穴であった可能性がある。

### 第2節 基本土層(図6、写真5)

調査区の基本土層は、L I・L IIに分けた。L Iを表土、L IIを地山とした。令和3年度の試掘・確認調査では、黒褐色の旧表土が確認されている。しかし、今回の調査区において旧表土とされた土層は認められず、表土直下が地山となる。なお、基本土層の状況から、削平など大きな地形改変の痕跡は認められなかった。

L Iを、さらにL I a・L I bに分けた。L I aは、表層の腐食土である。L I bは、比較的腐食に乏しい粘性土壤である。L IIは黄褐色系の土壤である。L IIの分布は、A 2・A 3グリッド付近に限られ、他の箇所では、L I直下が砂礫を多量に含む黄褐色土壤(10YR5/6)となる。

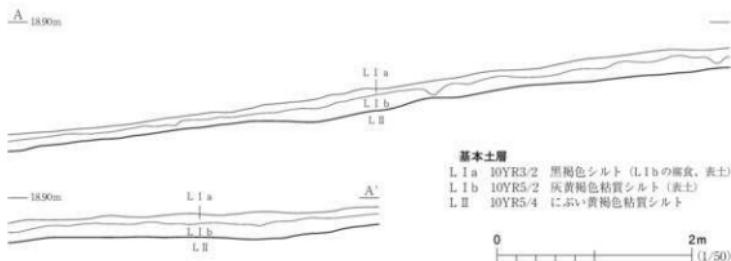


図6 基本土層

### 第3節 溝跡

#### 1号溝跡 S D 01

##### 遺構・遺物（図7、写真6～8・23）

1号溝跡は、B 3 グリッドの南部からA 4 グリッド方向へ弧状に延びている。2号・3号溝跡と重複するが、2号溝跡よりも新しく、3号溝跡よりも古い。

遺構内堆積土は $\ell$  1 の1層で、自然堆積土と判断した。1号溝跡の断面形は概ね舟底状を呈するが、壁の立ち上がりは直線的である。1号溝跡の上端幅は、最大で135cmを測る。遺構検出面から底面までの深さは、北部～中央部が約20cm、3号溝跡と重複する南部が約6cmである。なお、 $\ell$  1 から糸切り痕が残る陶器の底部破片（図7-1）が出土したが、細片のため詳細は不明である。

1号溝跡の性格・時期については、明らかにすることことができなかった。

#### 2号溝跡 S D 02

##### 遺構（図7、写真9・11）

2号溝跡はA 4・B 4 グリッドに位置し、南北方向へ直線的に延びている。2号溝跡は、1号溝跡・P 13～15と重複するが、1号溝跡よりも古く、P 13～15よりも新しい。なお、2号溝跡の掘り込みが1号溝跡よりも深く、重複する1号溝跡の底面下に2号溝跡が遺存していた。

遺構内堆積土は、断面形状に段差が認められたものの細分ができるず、 $\ell$  1 の1層とした。2号溝跡は、構築当初から上下2段であったと考えられる。なお、 $\ell$  1 は自然堆積土と判断した。

2号溝跡下段の断面形は、舟底状を呈する。2号溝跡の上端幅は最大で105cmを測るが、南部では段差が消失しその上端幅は約60cmとなる。遺構検出面から底面までの深さは、下段が20～25cm、上段が5cm前後である。なお、遺物は確認できなかった。

2号溝跡の性格・時期については、明らかにすることことができなかった。

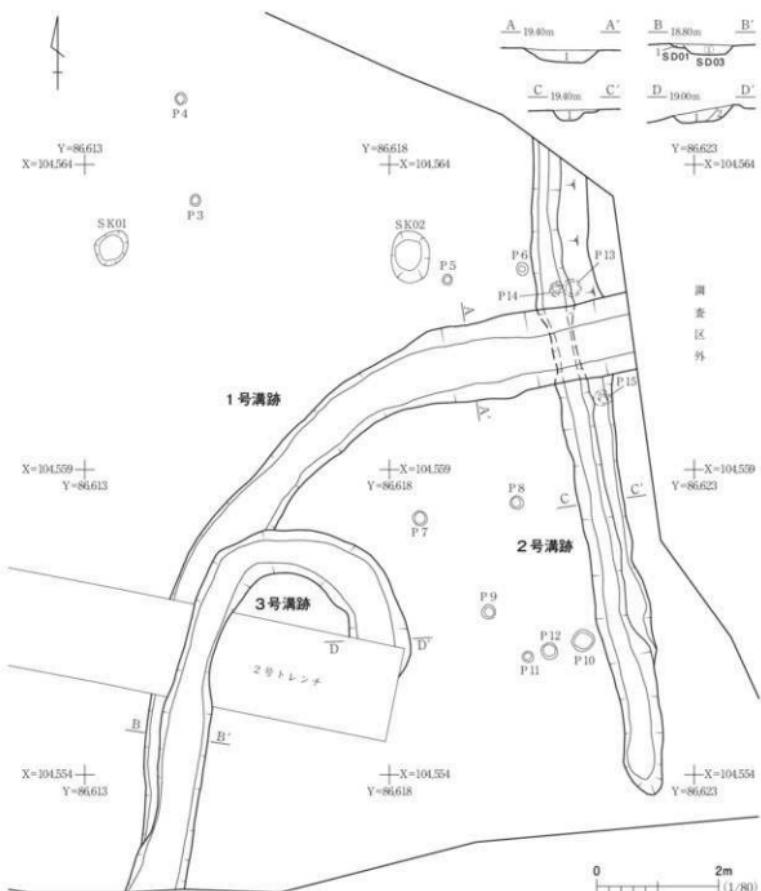
#### 3号溝跡 S D 03

##### 遺構・遺物（図7、写真8・10・12・23）

3号溝跡は、令和3年度の試掘・確認調査の2号トレンチで発見された遺構である。3号溝跡の北部がU状に転回するが、搅乱によりその先端を消失している。3号溝跡の位置はB 3 グリッドである。1号溝跡と重複するが、3号溝跡の方が新しい。

遺構内堆積土は $\ell$  1・ $\ell$  2の2層に分け、いずれも自然堆積土と判断した。3号溝跡の断面形は舟底状を呈する。3号溝跡の上端幅は80cm前後である。遺構検出面から底面までの深さは約20cmである。なお、 $\ell$  1 から外面が褐色を呈する焼締めの陶器片（図7-2）が出土している。

3号溝跡の性格・時期については、明らかにすることことができなかった。



1号溝跡堆積土 (A-A')

- 1 灰黃褐色粘質シルト 10YR5/2 (しまり強)  
1 細灰黃褐色粘質シルト 25Y4/2 (粘性強、しまりやや強)  
① 細褐褐色シルト 10YR3/3 (粘性やや強、しまり弱)



1 (SD01 #1)

2号溝跡堆積土 (C-C')

- 1 灰黃褐色粘質シルト 10YR5/2



2 (SD03 #1)

3号溝跡堆積土 (D-D')

- 1 細褐褐色シルト 10YR3/3 (粘性やや強、しまり弱)  
2 細灰黃褐色粘質シルト 25Y5/2 (粘性強、しまり弱)



図7 1～3号溝跡・出土遺物

## 第4節 その他の遺構

### 1号土坑 SK01

#### 遺構 (図8、写真13・14)

1号土坑は、令和3年度の試掘・確認調査で発見された遺構で、遺構内堆積土から鉄滓 (写真23)が1点出土している。1号土坑の位置はA 3グリッドである。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は $\ell$  1の1層とした。 $\ell$  1の観察から、人為堆積土のような痕跡は確認できなかつた。1号土坑の断面形は、ほぼ水平の底面から壁が急角度で立ち上がる。遺構検出面から底面までの深さは22cmである。1号土坑の平面形は円形に近く、その上端の東西幅は55cmである。

1号土坑の性格は不明である。時期は、鉄滓が出土したことから中世頃の可能性もある。

### 2号土坑 SK02

#### 遺構 (図8)

2号土坑の位置はA 3グリッドである。2号土坑と重複する遺構はない。遺構内堆積土は $\ell$  1の1層で、自然堆積土と判断した。2号土坑の断面形は皿状で、遺構検出面から底面中央までの深さは12cmである。1号土坑の平面形は梢円形で、その上端規模は東西62cm×南北84cmである。

1号土坑から遺物は確認できず、性格・時期ともに不明である。

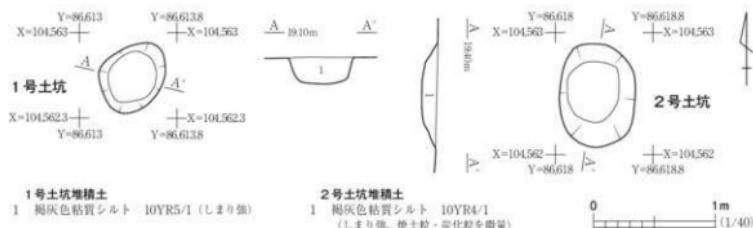


図8 1号・2号土坑

### 小穴 P 1～15

#### 遺構 (図9、写真15～22)

調査区において計15個の小穴P 1～15を検出した。P 2は、令和3年度の試掘・確認調査で発見された小穴である。小穴の分布は、調査区東端部に集中している。小穴の深さは約半数が20cm未満である。小穴の平面形はすべて円形である。小穴の各位置から、掘立柱建物跡・柱列等を見出すことはできなかつた。しかし、P 13～15については柱痕と考えられる堆積土が確認され、掘立柱建物等の柱穴の可能性がある。なお、P 13～15は2号溝跡と重複するが、P 13～15の方が古い。

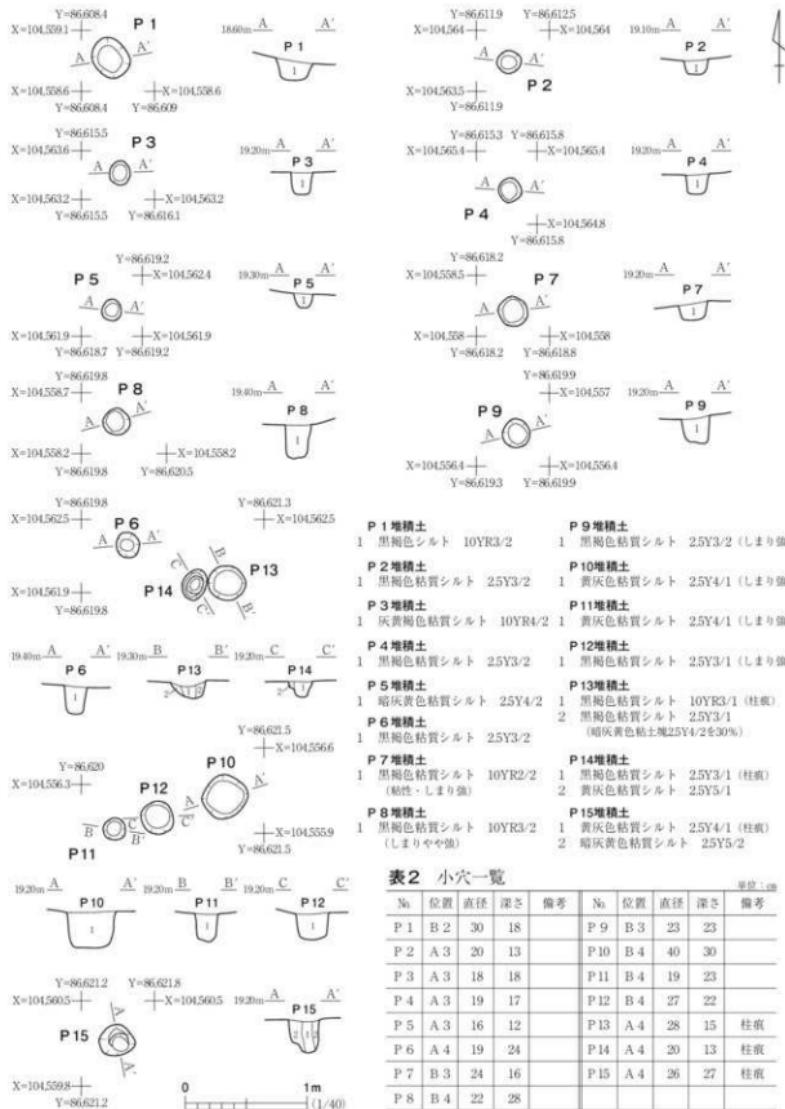


図9 小穴

### 第3章 まとめ

小名浜道路整備事業に伴う添野町大町遺跡の発掘調査を、令和4年5月9日(月)～5月31日(火)の期間で行った。調査実施面積は350m<sup>2</sup>である。調査対象となった箇所は、添野町大町遺跡の西端部で、舌状に張り出す丘陵の突端部である。添野町大町遺跡の北側を旧陸前浜街道が通じており、遺跡周辺は古来より交通要衝の一角であった可能性がある。

検出した遺構は、溝跡、土坑、小穴であるが、性格・時期が明確に判明した遺構はない。しかし、調査区東端部で検出した小穴の中には柱穴と考えられるものも含まれており、調査区の東側に掘立柱建物跡等の遺構が存在している可能性がある。

出土した遺物は少量で、時期が明確に分かることはできない。なお、令和3年度の試掘・確認調査では中世末頃と推測されるかわらけ(図10-1)が出土しており、この資料が添野町大町遺跡の年代を考える上で参考となる。

添野町大町遺跡の立地は江畑丘陵であるが、同丘陵では古代以前の遺跡が極めて少ない。しかし、中世に入ると城館跡が増え、添野町大町遺跡の半径3km内には、8か所以上の城館跡が分布している。添野町大町遺跡の南西約2.5kmの地点に位置する館跡遺跡は、昭和51年度に発掘調査が行われた連郭式の城館跡で、「上田城」の有力比定地と考えられている。上田城は、書状から15世紀中頃は岩城氏の拠点であり、また、16世紀末には佐竹氏の一門が常駐していたようである。

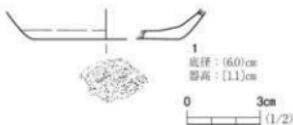


図10 かわらけ

今回の調査範囲が極めて限られていたこともあり、添野町大町遺跡の全容は不明とせざるを得ない。しかし、上田城のような15～16世紀の戦国時代の緊張関係の中に、添野町大町遺跡や周辺の城館跡も取り込まれていたと考えることも可能であろう。

#### 参考文献

- 馬日順一他 1980 「八幡台遺跡」(いわき市埋蔵文化財調査報告 第5番) いわき市教育文化事業団  
伊藤信雄・小林清治 監修 1986 「いわき市史第1巻 原始・古代・中世」いわき市  
伊藤信雄・小林清治 監修 1986 「いわき市史第8巻 原始・古代・中世資料」いわき市  
中山雅弘 他 1988 「浜通り地区の中世城館跡」『福島県の中世城館跡』(福島県調査報告書第197集) 福島県教育委員会

# 写 真 図 版





1 調査区全景（南から）



2 調査区東部（南東から）



3 調査区東部（北西から）



4 作業風景（南西から）



5 基本土層断面（南から）



6 1号溝跡全景（北東から）



7 1号溝跡断面（西から）



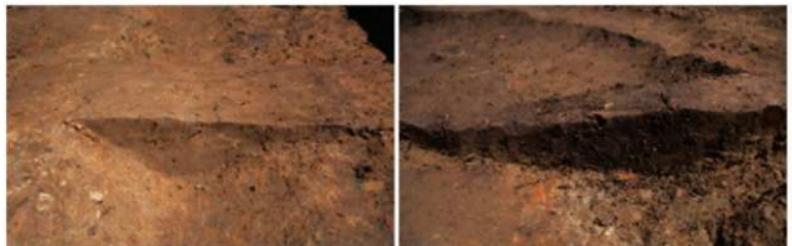
8 1号・3号溝跡断面（南から）



9 2号溝跡全景（南から）



10 3号溝跡全景（北西から）



11 2号溝跡断面（南から）

12 3号溝跡断面（南から）



13 1号土坑全景（北から）

14 1号土坑断面（北から）



15 P 2断面（南から）

16 P 4断面（南から）



17 P 7断面（南から）

18 P 9断面（南から）



19 P 12断面（南から）



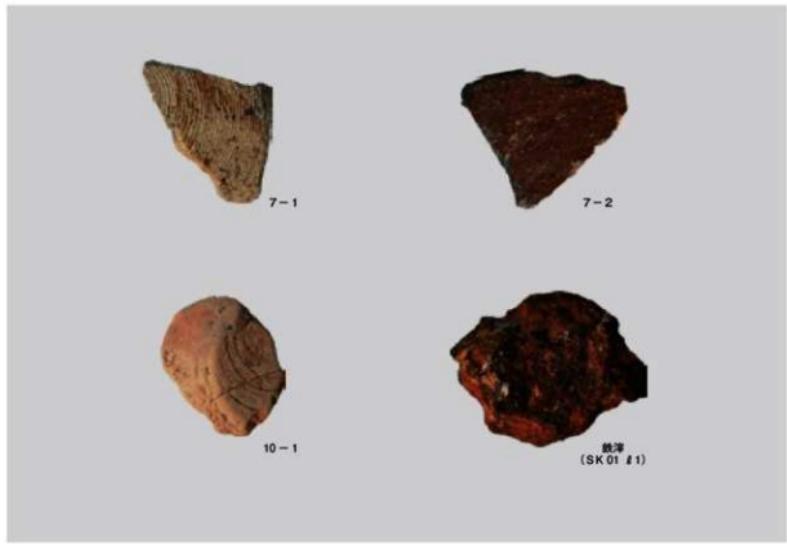
20 P 13断面（西から）



21 P 14断面（西から）



22 P 15断面（西から）



23 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	おなはまどうろせいびじぎょういせきはくつちょうさほうこく							
書名	小名浜道路整備事業道路発掘調査報告							
副書名	添野町大町道路							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第556集							
編著者名	香川健一							
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部調査課 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2022年11月30日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
添野町大町 道路	福島県いわき市 添野町大町	07204	1485	36° 56' 18"	140° 48' 20"	20220509 20220531	350m <sup>2</sup>	道路整備（小名浜道路）に伴う記録保存調査
所取遺跡名	種類	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
添野町大町 道路	集落跡	中世	土溝 小	坑跡 穴	2基 3条 15個	陶器	掘立柱建物跡の一部と考えられる柱穴を確認した。	
要約	添野町大町道路の周間に中世の城館跡が分布していることから、今回の調査で確認した掘立柱建物跡の一部と考えられる柱穴についても、城館跡に関連した遺構の可能性がある。							

※経緯度数値は世界地図(平成14年4月1日から適用)による。

---

福島県文化財調査報告書第 556 集

## 小名浜道路整備事業遺跡発掘調査報告

### 添野町大町遺跡

令和 4 年 11 月 30 日発行

編 集	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 (〒 960 - 8115) 福島市山下町 1 - 25
発 行	福島県教育委員会 (〒 960 - 8688) 福島市杉妻町 2 - 16
	公益財団法人福島県文化振興財団 (〒 960 - 8116) 福島市春日町 5 - 54
印 刷	福島県土木部 (〒 960 - 8670) 福島市杉妻町 2 - 16 八幡印刷株式会社 (〒 970 - 8026) いわき市平字田町 82 - 13